

野外上映型映画祭の現状と展開方向

矢 澤 利 弘*

1. はじめに

近年、景観を活用しながら野外で映画を上映する形式の映画祭が全国各地で増えつつある。本稿は、長野県諏訪郡原村の「星空の映画祭」、神奈川県逗子市の「逗子海岸映画祭」、首都圏近郊のキャンプ場で開催されている「夜空と交差する森の映画祭」という、代表的な3つの野外上映型映画祭を実地調査することによって、野外上映型映画祭の現状を把握し、それらの特徴と野外上映型映画祭が観客や地域に対してどのような機能を有しているのかについて考察することを目的としている。

映画の上映は一般に、映写機から投射される光をスクリーンに映し出すことによって行われる。映画館やホールといった静かで真っ暗な空間の中で、観客は椅子に座って静かにスクリーンからの反射光を見つめることが映画を鑑賞するときの基本姿勢であろう。映画の上映には本質的に暗闇と静寂が求められ、にぎやかな祭りの喧噪とは対立するものである。

だが、映画の上映は屋内に限られるわけではない。映画の野外上映は従来から広く行われており、決して珍しいものではない。映画祭においても、上映企画の一つとしての野外上映はしばしば見受けられる形態である。例えば、スイスのロカルノ国際映画祭で開催される大規模な野外上映はこの映画祭の呼び物の一つである。映画祭の期間中、町の中心にある広場、ピアッツァ・グランデには巨大なスクリーンが設置さ

れ、毎晩開催される上映会では、5,000人規模の観客が野外でスクリーンに釘付けになる。

加藤(2006)は、ロカルノ国際映画祭の野外上映について、次のように述べている。「なにしろこれは映画祭である。祭とは民衆のリビドーが神憑りの催事に向かって一点に収斂していくプロセスである。これはスクリーンという光の扉に向かって広場のなかで押し合いへし合いする観客たちの祭である。やがて回転するサーチライトが星明かりの下の劇場を照らしだしてアナウンスがはじまれば、あとはただもう往時のピクチュア・パレスのスクリーンもかくやと思わせる縦約八メートル、横約一三メートルはあろうかと思われる巨大スクリーンの迫力に、湖から吹きつける涼風になぶられながら酔いしれるだけである」。

これは国内においても同様なことがいえる。現存する映画祭のなかで日本最古といわれる大分県の「湯布院映画祭」では、JR由布院駅の駅舎に手作りのスクリーンを設置して名画を上映するのが前夜祭の恒例になっている。また、神奈川県川崎市の「KAWASAKI しんゆり映画祭」では2000年から特別企画として「なつやすみ野外上映会」を実施しており、市内の小学校校庭にて映画を野外上映している。「したまちコメディ映画祭 in 台東」では、映画祭の開催前に行うカウントダウンイベントとして、上野恩寵公園の噴水前広場で野外上映会(まちかど上映会)を行っている。埼玉県川口市の「SKIPシティ国際Dシネマ映画祭」では会期中、施設内の広場で子供向けの映画作品を野外で上映している。

* 広島経済大学経済学部教授

また、以上のように一部の作品を野外上映するだけではなく、基本的にすべての作品を野外上映するのを基本としている映画祭も増えてきている。広島県尾道市瀬戸田で開かれている「瀬戸田映画祭」では、高校の中庭や廃校となった小学校の海沿いのグラウンド、大理石の庭園などに映像を投射したり、海岸にスクリーンを設置したりするなど、瀬戸内海にある生口島・高根島の様々な場所を使用して野外上映を行っている。京都の祇園商店街で開催される「祇園天幕映画祭」では、歩行者天国となる四条通りに複数のスクリーンを設置して映画を野外上映している。

通常の屋内映画館のように理想的な環境とは言えない野外上映会に、なぜ人は惹きつけられるのだろうか。本稿では、基本的にすべての作品を野外で上映する形態の映画祭を野外上映型映画祭と呼ぶことにして、3つの事例を具体的に紹介しながら、それらの特徴と野外上映型映画祭が観客や地域に対してどのような機能を有しているのかについて考察する。

2. 先行研究と研究の方法

2.1 先行研究

本研究は、野外上映型映画祭の現状を把握することが目的の一つである。映画祭については、映画専門誌などでの映画祭の紹介記事や各映画祭が作成・発行するカタログやパンフレットなどがこれまでも相当数が公刊されてきており、映画祭関係者による講演や映画祭をテーマにしたシンポジウムが開催されることも少なくない。だが、その成果を理論化する努力は少なく、映画祭は映画学研究において補助的に扱われる程度であった。

ただ、2009年以降、米国では映画祭に関する学術論文集“Film Festival Yearbook”が毎年発刊されるなど (Iordanova and Rhyne, 2009) (Iordanova and Cheung, 2010) (Iordanova and

Cheung, 2011) (Iordanova and Torchin, 2012) (Marlow-Mann, 2013) (Iordanova and Peer, 2014)、近年になって映画祭の学術的研究が進みつつある。

日本では2008年に、映画祭の実態についての基礎的なアンケート調査をベースにした「『映画祭』と『コミュニティシネマ』に関する基礎調査」報告書 (コミュニティシネマ支援センター) が刊行され、それ以降、映画祭についての社会科学的な研究が徐々に進められてきた。

映画祭の先行研究は、①映画祭の観客の視点からの研究、②映画祭の主催者側の視点からの研究、③映画製作者など映画祭への作品出品者の視点からの映画祭を活用したプロモーション戦略に関する研究、④映画祭による経済効果、文化的効果といった外部への誘発効果に関する研究、という4つのカテゴリーに大別することができる。

このうち、①の映画祭の観客の視点からの研究に関しては、田山 (1988) 及び田山 (1991) あるいは中川 (1994) が、映画評論家としてカンヌ国際映画祭について考察しているほか、川村 (1995) や草壁 (1999)、キム (2011) が世界中で開催されている主要な国際映画祭について個別事例を紹介している。また、塩田 (2011) は映画祭のうち、ファンタスティック映画祭と呼ばれるジャンルに特化して、複数の事例を紹介している。これらはいずれも、自らの体験に基づいて、筆者らが訪問した映画祭の概要と上映された作品、ゲストとの交流などについて、主に人文科学的な観点から記述されたものである。

②の映画祭の主催者側の視点からの研究に関しては、小松沢 (1995) が東京国際ファンタスティック映画祭について、小松澤 (2008) がうばり国際ファンタスティック映画祭について、映画祭プロデューサーの立場から論じている。また、別所 (2009) は、自らが立ち上げた短編映画祭であるショートショートフィルムフェス

ティバル & アジアのプロジェクトマネジメントについて、主に筆者の経験を基にして論じている。

③の映画製作者など映画祭への作品出品者の視点からの映画祭を活用したプロモーション戦略に関する研究に関しては、Holland (2008) や Gore (2009) などがある。これらは、映画製作者がいかにして映画祭に作品を出品し、いかなる活動を行うべきかというプロモーション戦略について論じたものである。

④の映画祭による経済効果、文化的効果といった外部への誘発効果に関する研究については、Hong Kong Film Festival (2003) が香港国際映画祭について、秋吉 (2013a)、秋吉 (2013b) がひめじ国際短編映画祭について、それぞれ映画祭の開催による地域への経済波及効果についての推計を試みている。

本稿は、野外上映型映画祭について、主催者側のマネジメントの視点に立脚して、観客や地域に与える効果について考察しようとするものである。従って、本稿は②の映画祭の主催者側の視点からの研究に属するものである。日本におけるこのカテゴリーに関する従来の研究は、映画祭の主催者が自らの経験に基づいて、自分が運営してきた映画祭についての体験的記述が大部分を占めている。ただ、近年は、複数の映画祭を横断的に考察し、そのマネジメントの様相を分析しようとする動きがでてきている。例えば、赤崎 (2008) は、全国の映画祭に対するアンケート調査を基にして、映画祭というものが時代的に変容していることを指摘する。児玉 (2009) は、東京国際映画祭と湯布院映画祭との比較を基軸にして、映画祭を調査する際の視点として、「映画上映」に関する視点、映画祭の「マーケット機能」に関する視点、映画祭自体をどのように「経営」すべきなのかという視点、そもそも映画祭が「『祭り』足りえているか」という視点、という4つを打ち出して考察

している。また、畑中 (2011) は、映像系フェスティバルには、教育文化支援環境としての意義があると指摘する。

矢澤 (2011) は、サービス業のマーケティングの観点から映画祭のマネジメントを考察しており、矢澤 (2012a)、矢澤 (2013c) において分析を発展させている。また、矢澤 (2012b) と矢澤 (2013a) は、地域活性化の見地から、映画祭の経営モデルを導出した研究である。映画祭を新たに立ち上げる人的スキルについては、矢澤 (2013b) がアントレプレナーシップの視点から2つの映画祭の事例を紹介している。さらに、矢澤 (2015) は、短編映画祭が映画人材の育成に与える効果についての研究である。

このように、映画祭を横断的に分析することによるマネジメントの研究は徐々に進みつつある状態であるが、映画祭のマネジメント研究については、先行研究が体系化され、十分に積み重ねられている状況にあるわけではない。

映画上映環境については、加藤 (2006) が、映画館と観客との関係性を、映画館、映画作品、プログラム、観客という4つの水準から論じており、わずかに屋外上映会についての人文的な考察を行っているものの、映画の野外上映という上映環境について、日本の複数の映画祭を横断的に考察した研究は行われていない。映画祭の研究をこの4つの水準で分類した場合、映画作品とプログラム、観客についての研究は進みつつあるが、映画館すなわち映画上映環境についての研究はほとんど行われていない状況にある。本稿は、その間隙を埋める役割を担っている。

2.2 研究の方法

一般に、研究には仮説検証型の研究と仮説導出型の研究がある。前述したように、複数の映画祭を横断的に分析する方法によるイベントマネジメントの研究は徐々に進みつつある状態で

はあるが、未だ先行研究が十分に積み重ねられている状況にあるとは言い難い。そのため、映画祭のマネジメントの研究は、先行研究から導出された仮説を精緻化するタイプの研究には馴染みにくい領域である。そこで、本稿では、いくつかの映画祭の事例を比較検討することによって、一定のインプリケーションを導出するスタイルの研究を行うことにする。

本稿では、日本で開催されている野外上映型映画祭のうち、代表的なものといえる星空の映画祭、逗子海岸映画祭、夜空と交差する森の映画祭を取り上げている。研究においては、それぞれの映画祭が開催されている会場を实地調査し、また、関係者からの聞き取り調査を実施した。实地調査は3つの映画祭ともに、主に2015年中に開催された映画祭について実施し、映画祭の過去の経緯については、各映画祭の主催者が作成しているウェブサイトの閲覧や聞き取り調査によって把握した。なお、实地調査は、星空の映画祭が、2015年8月10日から11日、逗子海岸映画祭が2015年4月25日から26日、夜空と交差する森の映画祭が、2014年10月4日から5日及び2015年10月3日から4日にかけて実施した。

以下、第3章から第5章まで、星空の映画祭、逗子海岸映画祭、夜空と交差する森の映画祭について、それぞれの映画祭の概要と特徴を紹介する。

3. 星空の映画祭

3.1 映画祭の概要

星空の映画祭は、長野県諏訪郡原村にある八ヶ岳自然文化園の野外ステージで毎年8月上旬ごろから下旬にかけて開催されている映画の野外上映会である。横が11メートル、縦が5メートルのスクリーンを会場内に設置し、観客はステージ前の芝生や石段に座って映画を見ることになる。会場内には「星空屋台村」が出店し、日替わりで地元の店が飲食物の出張販売を

行っている。

同映画祭は、日替わりで毎日20時から1本ずつ長編映画を上映している。年々、上映作品数を増やしており、2010年には2週間で4本を日替わりで上映しただけだったが、2015年には合計9本の映画が上映されていた。上映する映画は、基本的に既に劇場公開された作品であり、未公開の新作は含まれていない。また、審査や授賞を伴うコンペティション形式は採用していない。

原村は別荘地として有名な地域であり、八ヶ岳自然文化園は、自動車利用で会場最寄りの中央自動車道諏訪南インターチェンジから約15分、小淵沢インターチェンジからは約20分の場所にある。東京の新宿からであれば、2時間20分程度で会場に着くことができる。

料金は、当日券が大人1,200円（前売り券は1,000円）、子供（小中学生）が500円、未就学児童は無料となっている。これは通常の映画館での興行に比べて若干低価格である。

3.2 経緯

星空の映画祭は、原村内に住むペンションのオーナーが、地元の映画館である茅野新星劇場の社長の協力を得て、1984年に映画の野外上映会を開始したのが始まりである。当時、まだ八ヶ岳自然文化園はなく、何にもない野原だった場所に手作りのスクリーンを張り、近所の人々の協力を得て、電気を引き、映写小屋を設置して野外上映会を始めた（石井・ヤマザキ、2013）。以来、「スターダストシアター」という名称で、原村の夏の風物詩として続けられてきた。地方自治体などからの助成金もなく、入場料収入を財源として24年間継続されてきたが、運営者自身が高齢になったことや、DVDの普及やシネコンの台頭による観客の減少の影響によって、資金不足に陥り、2006年の開催を最後に上映会は休止を余儀なくされた。

表1 星空の映画祭の開催期間と上映作品

年度	開催期間	上映作品
2010年	8月8日～8月22日	『アバター』『夏時間の庭』『ザ・ムーン』『ガマの油』の4本
2011年	8月7日～8月22日	『ガリバー旅行記』『アクロス・ザ・ユニバース』『トゥルー・グリッド』『時をかける少女』『岳』の5本
2012年	8月5日～8月26日	『ニュー・シネマ・パラダイス』『キツキと雨』『ももへの手紙』『ラスト・ワルツ』『ヒューゴの不思議な発明』『宇宙家族』『サウダージ』の7本
2013年	8月4日～8月25日	『おおかみこどもの雨と雪』『世界最古の洞窟壁画 忘れられた夢の記憶』『ソウル・パワー』『道-白磁の人』『Playback』『ミッドナイトインパリ』『ライジング・ドラゴン』『レ・ミゼラブル』の8本
2014年	8月1日～8月24日	『アナと雪の女王』『風立ちぬ』『永遠の0』『バック・トゥ・ザ・フューチャー』『かぐや姫の物語』『ムーンライズ・キングダム』『LIFE!』『ブルース・ブラザーズ』の8本
2015年	7月31日～8月23日	『シンデレラ』、『ベイマックス』、『サウンド・オブ・ミュージック』、『ピリギヤル』、『ライトニング・イン・ア・ボトル』、『アラヤシキの住人たち』、『春を背負って』、『はじまりのうた』、『ルパン三世カリオストロの城』の9本

(出典：星空の映画祭告知用チラシ及び同映画祭ホームページから筆者作成)

その後、この映画祭を見て育った若い有志らが実行委員会を結成し、上映会を復活させたのが現在行われている星空の映画祭である。上映会を復活させるに当たって、発起人らは、「復活を夢見る会」という準備組織を作り、インターネット上のコミュニティサイトやチラシなどで仲間を募ったところ、強い反響があり、多くの応援やアドバイスを受けた。上映作品を決定し、開催日程を確定する段階になってきた頃から、映画祭を手伝いたいという人々が集まりはじめ、ボランティアスタッフは十数人となった。会場には旧映画祭が休止される前から使用してきた映写小屋と映写機が残されており、復活後の映画祭でも、これらの設備を活用することにした。その結果、原村在住のボランティアチームが主となって運営することによって、「星空の映画祭」は2010年8月に復活開催されることになった。

以下、同映画祭の公式ホームページを参照しつつ、映画祭が復活した2010年から2015年までの活動を見ていく。この期間の映画祭の開催時期と上映作品は表1の通りである。上映する作品のプログラミングに当たっては、知名度のあ

る作品だけでなく、単館系のヨーロッパ映画などを加えるという方針を採用していることが分かる。2010年の映画祭初日には、地元のミュージシャンによる演奏やファイヤーダンスによるパフォーマンスを行ったほか、映画『ガマの油』の上映時には、監督・主演の役所広司による舞台挨拶や質疑応答が実施された。結果として、2週間の会期で動員は約1,400人となった。

2011年の映画祭初日には前年度と同様、地元のミュージシャンらによるパフォーマンスと村長の挨拶などが行われた。この年から一口1万円からの協賛金の募集が開始された。この年から、地元の飲食店によって、飲み物や軽食の出張販売が行われた。2012年は、テーマとして「映画の再生」が掲げられ、新作に加えてクラシック枠・名画枠が設けられた。例えば、イタリア映画『ニュー・シネマ・パラダイス』や音楽ドキュメンタリー『ラスト・ワルツ』といった旧作が上映された。また、映画祭のオープニングや、最終日の『ラスト・ワルツ』上映の際には、地元ミュージシャンによるミニライブが行われた。

この年には、映画情報サイト「シネマカフェ」

とのタイアップ企画として、東京・新宿をバスで出発し、当日の上映作品を鑑賞したあと、会場近くのペンションで一泊するという「星空の映画祭オフィシャルツアー」が実施された。こうした活動の結果、この年の動員は約4,000人となった。

2013年は、飲食店の出張販売が店舗数、種類ともに増加した。また、前年に引き続き、一泊二日で東京の新宿と原村をバスで結ぶオフィシャルツアーが実施された。

星空の映画祭は35ミリフィルムで映画を上映することが特徴の一つだったが、映画上映のデジタル化が一般化したことから、新作のフィルム上映が困難になることが危惧された。だが、同映画祭の上映を担当している映画館がデジタル映写機を購入したことにより、2014年は、デジタルで制作された新作映画の上映も可能になった。『アナと雪の女王』の上映には1日で820人が来場し、最終的な来場者数は7,958人となった（長野日報、2014）。また、2015年は、首都圏を中心とする県外者が半数以上を占めるなど、宿泊して映画を楽しむ人が目立ち、7,366人を動員することができた（長野日報、2015）。

このように、2010年の約1,400人から2014年と2015年の7,000人台へと、星空の映画祭の観客動員数は大きく拡大している。

3.3 映画祭の特徴と工夫

八ヶ岳の麓、標高1,300メートルの場所に位置する上映会場は、大自然に囲まれ、スクリーンの上に広がる夜空は、「星空の映画祭」という名前どおり、天候の良い日にはまさに満天の星空となる。このような景観のなか、1984年に開始された映画祭は、中断の時期があったにせよ、30年以上の歴史を持つ。そのため、毎年この映画祭を訪れるリピーターも少なくない。

開始当初から長野県茅野市にある映画館茅野新星劇場（現在は閉館）の協力を得て、野外に

も係らず全作品を35ミリフィルムで上映を行ってきたこともこの映画祭の特色である。もっとも近年は、デジタル化の進行により、新作のフィルムでの上映が難しくなったため、デジタル上映が併用されている。

会場周辺には、飲食店やコンビニエンスストアなどが存在しない。映画祭を復活させた当初は、会場での飲食物の販売を実施していなかったが、次第に地元の飲食店との協力関係を深め、近時の開催では、日替わりで飲食店ブースを出店することによって、観客の便宜を図っている。

上映する映画は、知名度のある作品ばかりではなく、単館系の芸術性の高い作品などのこだわりのある作品を取り混ぜてプログラミングしていることも特徴的である。

4. 逗子海岸映画祭

4.1 映画祭の概要

逗子海岸映画祭は、毎年4月下旬から5月上旬のゴールデンウィークの期間を中心に、神奈川県逗子市の逗子海岸で開催されている野外の映画上映イベントである。

開催期間中は、浜辺に300インチの巨大スクリーンを設置して映画が上映される。映画館のように椅子に座って集中して映画を鑑賞するのではなく、観客は砂浜に座って飲食をしながら、あるいは浜辺に寝そべりながら、といったスタイルで気軽に映画を見ることができなのが特徴の一つである。

逗子海岸にある上映会場は、最寄りのJR横須賀線逗子駅から徒歩15分程度の場所に位置している。東京駅から逗子駅まではJRの電車で約1時間であり、都心から会場までは1時間半程度の時間で到着することができる。

映画の上映は空が暗くなってからだが、まだ明るい時間から音楽を流し、レストランやバー、パザールなどを同時に営業している。観客は、映画の上映時刻に合わせて来場することもでき

るが、早めに来場し、飲食やイベントに参加しながら、映画の上映開始を待つことができる。

入場料は、2015年の場合、一般が1,000円、中高校生が500円、小学生以下が無料だった。なお、逗子市民は身分証明書の提示により、500円割引となる。同映画祭では、コンペティション形式を採用しておらず、賞の授与などはない。

4.2 経緯

逗子海岸映画祭の始まりは、移動式映画館を運営するカメラマン、映画を見ながら食事のできるシネマカフェの運営者、インテリアデザイナーの3人が逗子海岸での映画上映の企画を立ち上げたことがきっかけだった。

同映画祭のウェブサイトによると、第一回逗子海岸映画祭は、「浜の映画館」と題され、砂浜の整地からスクリーンの設置、テントの設営などを手作りでを行い、企画の発案から2カ月程度の準備期間を経て、2010年の5月上旬に開催された。映画の野外上映のほか、音楽ライブが

行われ、約2,000人の来場者が集まった。2011年は、若干スタイルが変更されて、「海の映画館」と題して開催され、来場者は約2,600人となった。2012年からは、スケートボード、ビーチサッカー、ヨガ、シルクスクリーンなどのワークショップが多く取り入れるようになった。2013年の映画祭は、日替わりでテーマが設定され、それぞれのテーマに関連するイベントの実施や映画上映が行われた（表2参照）。2014年は、テーマに「Local to Global」が掲げられ、それぞれの日にテーマとなる国が選定されて、テーマに沿った映画が上映された（表3参照）。また、テーマに沿ったゲストが招聘され、テーマに関連した料理が会場内で提供された。前年には、映画の上映が過度の混雑状態となった日があったため、この年からはチケットの販売が毎日当日券のみの700枚に限定され、入場者数に制限が設けられた。2015年は、前年と同様、日替わりで国別のテーマが設定され、それぞれの国の映画が上映された（表4参照）。

表2 逗子海岸映画祭における2013年の日々のテーマと上映作品

日付	テーマ	映画上映前の主なプログラムと上映作品
4月27日	オープニングイベント	ヨガのレクチャー、竹中直人らのゲストライブ、『エンド・オブ・ザ・ワールド』を上映
4月28日	ライブ福島デー	東日本大震災後の福島についてのトークショー、『あの日～福島は生きている』『B-point』を上映
4月29日	キッズデー	短編『ともとも』『旅の影響からできた、ちょっくんアニメーション』、『グーニーズ』（吹き替え版）を上映
4月30日	BEASTIE BOYS MCA メモリアルデー	『イグジット・スルー・ザ・ギフトショップ』を上映予定だったが、強風のため中止
5月1日	エクセレントフィルムデー	ノルウェーの魅力についてのトークショー、『グラン・ブルー オリジナル版』を上映
5月2日	クラシックフィルムデー	無声映画『アーティスト』を生演奏で上映
5月3日	ジャジースポーツデー	アウトドアがテーマの『STOVE』『WHITE NOISE』ほか、数本の短編ドキュメンタリーを上映
5月4日	フード・アンド・ライフデー	食をテーマにした日、「未来の食卓2013」を開催、『ソウルキッチン』を上映
5月5日	横乗りデー	『SHORT FILM of SKATE×SURF×SNOW』を上映
5月6日	ZUSHI×BASQUE デー	逗子とバスクの交流を計る1日。『Amerikquak』『Jim Denevan in Muudaka』ほかを上映

(出典：筆者作成)

表3 逗子海岸映画祭における2014年の日々のテーマと上映作品

日付	テーマ	映画上映前の主なプログラムと上映作品
4月26日	イスラエルデー	イスラエル音楽紹介, イスラエル映画『迷子の警察音楽隊』を上映
4月27日	インドアデー	インド音楽紹介, インド音楽生演奏, インド映画『きっと, うまくいく』を上映
4月28日	ジャパNDER	日本映画『そして父になる』を上映
4月29日	キッズデー	楽器奏者によるパフォーマンス, 『E.T.』を上映
4月30日	インドネシアデー	ガムラン奏者らによるパフォーマンス, 『インドネシア影絵と音楽』
5月1日	スペインデー featuring バスク	パフォーマンス, スペイン映画『ブランカニエバス』を上映
5月2日	カリビアンデー	カリブ音楽の紹介, キューバ映画『永遠のハバナ』を上映
5月3日	竹中直人デー	竹中直人によるトーク, 『ONLY YOU』を上映
5月4日	アルゼンティーナデー	写真家や現代アーティストによるアルゼンチンの紹介, アルゼンチンを舞台にした映画『モーターサイクルダイアリーズ』を上映
5月5日	スケートボードデー	『田中秀典映像』など短編を上映
5月6日	ブラジルデー	ビーチサッカー教室, ビーチサッカートーナメント, ブラジル映画『サントス 美しきブラジリアン・サッカー』を上映

(出典:筆者作成)

表4 逗子海岸映画祭における2015年の日々のテーマと上映作品

日付	テーマ	映画上映前の主なプログラムと上映作品
4月25日	ポルトガルデー	ポルトガル語圏の音楽や文化についてのラジオ放送, ポルトガル音楽の生演奏, ポルトガル映画『アマリア』を上映
4月26日	インドアデー	インド音楽と文化についてのラジオ放送, インド音楽の生演奏, インド映画『バルフィ! 人生に唄えば』を上映
4月27日	クラシックフィルムデー	アメリカ映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー PART2』を上映
4月28日	キッズデー	怪獣ショー, テレビ映画『ウルトラマン』とアメリカ映画『ゴーストバスターズ』(日本語吹き替え版)を上映
4月29日	ミュージックデー	ヒップホップについてのラジオ放送, アメリカ映画『アート・オブ・ラブ』を上映
4月30日	ジャパNDER	竹中直人氏がゲストのラジオ放送, 邦画『しこふんじゃった』を上映
5月1日	ミュージックデー	ピーター・バラカン氏の選曲とトーク, アメリカ映画『ソウル・パワー』を上映
5月2日	フランスデー	フランス人デザイナーによるトークショー, フランス映画『プレイタイム』を上映
5月3日	スペインバスクデー	バスク地方に関する短編映画を複数上映
5月4日	インドネシアデー	インドネシア影絵と音楽によるショー
5月5日	スケートボーディングデー	スケートボードに関する短編映画を複数本上映
5月6日	マウンテンフィルムデー	ビーチフットサル大会, 山をテーマにした短編映画を複数本上映

(出典:筆者作成)

4.3 映画祭の特徴と工夫

逗子海岸映画祭は、「Play With The Earth」（地球と遊ぶ）をコンセプトにしており、会場には映画のスクリーンだけでなく、メリーゴーランドやスケートボードランプといった設備が設置され、映画の上映前にも各種ワークショップ、ビーチフットサル大会など、観客が積極的に参加できるイベントが数多く準備されている。

このような会場の設計と演出によって、映画祭と銘打っているものの、観客は「映画を楽しむ」だけでなく、「映画も楽しむ」という姿勢で映画祭に参加することができると思われる。

また、毎日設定されるテーマと、上映する映画の内容が紐付けられているほか、料理のメニューや演出がテーマに沿って毎日変えられている点もユニークな工夫である。

2015年の映画祭を例にとれば、ポルトガルデーには、ポルトガル映画の上映に合わせて、浜辺に開局しているマイクロラジオ局のゲストとして、ポルトガル文化に造詣の深いフリーライターが出演し、ポルトガル語圏の音楽や文化を紹介していた。また、映画の上映前にはポルトガル大使による挨拶が行われ、会場内のレストランでは、ポルトガルのファストフードが提供された。また、インディアデーには、インド映画の上映に先立ち、マイクロラジオ局のゲストとしてインド音楽やインド文化に詳しいライターが出演し、解説を行った。夕刻からはインド音楽の生演奏が行われ、地元のインド料理店がレストランでインド料理を提供した。このような工夫により、観客が複数日に渡って映画祭を訪れても、常に新鮮な内容に接することができるようなシステムになっているといえる。

5. 夜空と交差する森の映画祭

5.1 映画祭の概要

夜空と交差する森の映画祭は、自然に囲まれ

た大規模な公園内に設営した複数のスクリーンで、夕刻から翌朝にかけてオールナイトで映画を野外上映するイベントである。この映画祭では、森や川、岩場などの多様な地形や自然環境に合わせて設営した複数のスクリーンで上映されている映画を、参加者が自由に見て回ることができる。これは、複数のステージでライブが同時進行する形式の音楽フェスティバル（音楽フェス）と似たスタイルであり、この上映会は日本初の野外映画フェスと銘打っている。

5.2 経緯

同映画祭は、代表の佐藤大輔氏らが2013年4月に結成した任意団体「森の映画祭実行本部」を中心に、「森の映画祭実行委員会」を加えた約40人のスタッフが参加して開催までの準備活動を行った。

第1回目の映画祭は、埼玉県秩父郡にあるキャンプ場「フォレストサンズ長瀬」を会場として、2014年10月4日の夕刻から翌朝にかけて開催された。この会場は、自動車であっても電車であっても、都内から2時間程度で到着できる距離にある。

会場には、長編映画を上映するメインステージと、短編映画を上映するサブステージが設置され、サブステージはさらに、フォレストステージ、ザ・ロックステージ、リバーステージの3つに分かれていた。このように、大小合わせて、4つのステージが設置され、18時30分から翌朝まで、それぞれのステージに設置したスクリーンで映画が並行して上映された。具体的には、メインステージでは長編映画4本（『時をかける少女』、『眩しくて見えなかったから長い瞬きを繰り返した』、『ソウル・フラワー・トレイン』、『ハンガーゲーム』）、サブステージでは短編映画43本、合計で47作品が用意されていた。

入場券は、一般が5,500円、学生が3,800円と

いう価格設定であり、当初は、集客目標を300人に設定していたところ、最終的な入場者数は約800人、ボランティアスタッフは約200人に膨れ上がり、入場チケットは完売となった。結果として、第1回目の映画祭は1,000人以上の参加者を集めることができ、翌年には第2回の映画祭を開催することになった。

2015年の映画祭では、前年とは開催地が変更され、山梨県北杜市白州町にある白州・尾白の森名水公園「べるが」が会場となった。代表の佐藤大輔氏によると、会場は毎回変えていく予定であり、この会場に決定するまでに約40カ所の候補地を実際に探索したという。自動車で来場する場合、都内からであれば中央自動車道経由で新宿から会場まで約2時間強の時間で到着することができる。電車を利用する場合は、新宿駅から会場に最寄りの小淵沢駅までは中央線特急列車を使えば約2時間、小淵沢駅から会場までがシャトルバスで、20分程度で着くことができる。

同映画祭では、「映画鑑賞から映画体験へ」というコンセプトが打ち出されており、それぞれ特有の世界観を持つステージが制作されていた。長編映画の上映やステージ企画を行うメインステージと短編映画を上映する3つのサブステージという構成は前年の映画祭と同様だったが、サブステージについては、ホラーやファンタジーなどを中心としたミステリーフォレスト、ラブコメディやヒューマンドラマを中心としたロマンチックバレー、アクションやSFなどを中心としたバーニングスクエアの3つが設置され、それぞれのステージは上映する映画の各々のテーマに合わせてデザインされていた。

2015年の入場券は、安全面の確保に費用がかかるという理由から、1人あたり8,800円と、前年より値上げとなった。実際、多くの参加者がいて、にぎやかであるといっても、小川の流れる広大な森は、深夜ともなると相応暗くなり、

必ずしも安全な場所とは言い切れない。そのため、会場内の要所には多くの警備員が配置されており、安全対策が強化されていた。

前年は会場内のトレーラーハウスとコテージでの宿泊が可能だったが、2015年の映画祭では、テントを持ち込んでの宿泊も可能となっていた。ただし、会場内でテントを利用する場合、大きいテント（4-5人用）は8,000円、小さいテント（1-2人用）は2,000円の場所代が必要である。

5.3 映画祭の特徴と工夫

同映画祭は、本稿で取り上げた他の2つの野外上映型映画祭と比べて、最も野外音楽フェスティバルの形式に近い。例えば、国内の野外ロックフェスティバルの代表格といえるフジロックフェスティバルは、新潟県湯沢町苗場スキー場を会場にしており、会場内に設けられたキャンプサイトには毎年多数の参加者がテントを張って宿泊する。会場周辺にはホテルや民宿などが点在しており、それらに宿泊することもできる。また、体育館や音楽室内を利用した仮眠施設も用意している。

夜空と交差する森の映画祭も、こうした野外ロックフェスティバルと類似した形式を採用している。複数のスクリーンで同時に、それぞれ異なる作品を上映するのは、フジロックフェスティバルやサマーソニックなどの大規模な野外音楽フェスが複数のステージで、それぞれ異なるアーティストが同時時間帯に並行してライブを行うのと同じ形式である。また、野外のキャンプ場という場所や夜通しでの開催というスタイルについても、野外音楽フェスに共通するものがある。

複数のステージを設けることで、参加者は4つのステージ間を任意に移動することになる。そのため、参加者は集中して1本の映画を見るだけではなく、自然に触れ合ったり、参加者同

士で交流したりすることができる。それぞれのステージは、普通のスクリーンが張られているだけではなく、上映される作品のジャンルやテーマに合わせてステージがデザインされており、会場そのものの雰囲気を楽しめるような工夫がされていた。

4つのステージでは、同じ時間に並行して別々の映画の上映が行われるため、長編作品だけの上映であれば、各ステージを移動する機会が少なくなってしまう。そのため、メインステージ以外の上映作品は短編映画が主となっている。同映画祭では、上映する短編映画にはインディーズ系の作品を積極的に取り入れており、新人の発掘や認知拡大を図ろうとしていることが窺える。こうした工夫は、本稿で取り上げた他の映画祭には見られない点である。ただ、他の2つの映画祭と同様、作品のコンペティション形式は採用しておらず、賞の授与などはない。

6. 考 察

以上、自然と共生しつつ野外で映画を上映する形式の3つの映画祭の事例を見てきた。1つは長野県諏訪郡原村の星空の映画祭であり、2つめは、神奈川県逗子市の逗子海岸映画祭、3つめは埼玉県秩父郡と山梨県北杜市で開催された夜空と交差する森の映画祭である。

歴史的に見ると星空の映画祭が最も古く1984年に始まっており、逗子海岸映画祭は2010年、夜空と交差する森の映画祭が2014年の開始である。開催時期については、星空の映画祭は夏休み期間中の8月であり、ハイシーズンでの開催だが、逗子海岸映画祭は海岸での開催にも関わらず5月上旬、夜空と交差する森の映画祭は、若干肌寒くなってくる10月上旬のキャンプ場での開催ということで、必ずしもベストシーズンであるとはいえない。

これらの3つの映画祭の特徴をまとめたのが表5である。なお、開催期間、開催本数、料金

などは2015年開催時のものである。

以上を前提にして、野外上映型映画祭が、観客や地域に対して、どのような機能を有しているのかについて考察する。

まず、映画の野外上映は、映画鑑賞の堅苦しさを払拭する機能を持つということである。映画は静粛に見なければならないという一般的なルールをある程度緩めることによって、野外上映会は映画鑑賞に関するハードルを下げることになる。鑑賞時の基本姿勢についていえば、いずれの映画祭においても、地面に座ったり、寝そべったりしながら映画を鑑賞することができるスタイルになっている。かつてフランスの映画批評家アンドレ・バザンは、映画祭を修道院的と呼んだ(Bazin, 1958)が、そうした敬虔な雰囲気から映画鑑賞を解放し、文字通り映画祭に「祭り」の雰囲気を作り出す。Falassi (1987)は、祭りの基本要素として、①特別な行事で特徴づけた神聖なまたは世俗的な祝賀の機会、②有名な人物や出来事または重要産物の収穫を祝う年中行事、③芸術作品の一連の上演から成る文化イベントで、一人の芸術家や一つの分野に的をしぼる場合が多い、④市(いち)、⑤一般のお祭り騒ぎ、宴会気分、楽しい雰囲気の5つをあげている。映画祭は③に該当するが、野外上映型映画祭は、露店や飲食物の提供、開放的でリラックスした雰囲気での映画上映などによって、映画上映に④と⑤の要素を付加することによって、さらに祭りのにぎわいを創出することになる。

二つめは、映画鑑賞体験に地域性を付加するという機能である。映画館や屋内のホールといった場所で開催される上映会と比べ、特徴的な景観と相まって野外で上映された映画については、単に「映画を見た」という記憶のみならず、「映画をどこでどのような環境で見たのか」という体験を観客に強く認識させることになる。星空の映画祭では、澄んだ星空、逗子海岸映画

表5 3つの野外上映型映画祭の比較

	星空の映画祭	逗子海岸映画祭	夜空と交差する森の映画祭
開始年	1984年	2010年	2014年
開催地	長野県諏訪郡原村の八ヶ岳自然文化園	神奈川県逗子市の逗子海岸	埼玉県秩父郡の「フォレストサンズ長瀬」、山梨県北杜市白州町の白州・尾白の森名水公園「べるが」
都心からのアクセス	約2時間20分	約1時間30分	約2時間
開催時期	8月上旬から下旬	4月下旬から5月上旬	10月上旬の土・日曜日
開催期間	24日間	12日間	1泊2日
上映本数	長編映画9本	長編9本ほか短編映画	長編映画4本ほか全51本
プログラミングの方針	知名度のある作品だけでなく、単館系のヨーロッパ映画、古典的名作などを加える。	各日のテーマに合致した映画を選んで上映する。	商業映画の長編のほかインディーズ作品を積極的に取り入れることで次世代の才能の発掘と認知拡大を目指す。
スクリーン数	1	1	4
料金	1回1,200円	1日1,000円	8,800円
コンペティション	なし	なし	なし
コンセプト	(明示したものはない)	「Play With The Earth」(地球と遊ぼう)	映画鑑賞から映画体験へ
鑑賞時の基本姿勢	芝生や石段に座る	砂浜に座る、寝そべる	地面に座る、寝そべる
差別化された景観	澄んだ星空	にぎやかな砂浜	多様な地形と自然環境
映画以外のアクティビティ	日替わりの屋台村	日替わりの露店、レストラン、音楽ライブ、ビーチスポーツ設備	飲食ブース、キャンプ、リラックスできる鑑賞設備

(出典：筆者作成)

祭では、にぎやかな砂浜、夜空と交差する森の映画祭では、多様な地形と自然環境という、一般の映画館とは異なる、差別化された景観のなかでの映画鑑賞となる。こうした形態での映画上映によって、地域性が映画に付け加えられ、DVDやシネコンでの映画鑑賞では体験できない唯一無二の臨場感を観客に与えることになる。これは、映画祭を開催する地域に新たな魅力を付加しているといえるのではないだろうか。

三つめは、野外上映型映画祭は、参加者にとって他者とのコミュニケーションを図る場として機能するということである。野外上映型映画祭は、静粛に映画を鑑賞するだけではなく、積極的ににぎわいを生み出すような装置になっているのである。事例研究で取り上げた3つの

野外上映型映画祭では、いずれも映画上映以外のアクティビティを充実させている。逗子海岸映画祭ではレストランやバー、バザールといった店のほか、スケートボードランプやメリーゴーランドなどを設置し、映画を上映する前にはビーチフットサル大会などのイベントも数多く実施している。また、夜空と交差する森の映画祭では、森や川、岩場などの景観豊かな場所で複数のスクリーンを設置して、映画鑑賞や飲食を行うことにより、多くの映画や人との出会い、ステージ間を移動することの楽しみを味わうことができるように工夫されている。星空の映画祭でも、日替わりで飲食ブースを設けているほか、上映前のライブやパフォーマンスにも力を入れている。

四つ目は、野外上映型映画祭においては、普通の映画館での映画鑑賞とは異なり、「映画を楽しむ」だけでなく、参加者は、「映画祭の会場の雰囲気そのものを楽しむ」ことができるということである。いずれの映画祭においても、映画上映だけでなく、映画以外のエンターテインメント的な要素も重視している。観客は、映画を見するという行為を楽しむだけではなく、映画祭という空間を楽しむために同地を訪れるケースも少なくないのではないだろうか。逗子海岸映画祭のコンセプトは「Play With The Earth」（地球と遊ぼう）であり、夜空と交差する森の映画祭のコンセプトは「映画鑑賞から映画体験へ」である。これは主催者自身が、映画鑑賞を含めたトータルな空間プロデュースを志向していることを示している。また、例えば、2015年開催の夜空と交差する森の映画祭の入場チケットが、当日上映する映画のラインナップが発表される前から、売れ切れに迫る勢いの売れ行きを示したことから理解し得る。

今後の野外上映型映画祭は、上述したような特性を十分に活用した運営が望まれよう。

7. おわりに

本稿では、国内で開催されている代表的な3つの野外上映型映画祭を実地調査することによって、野外上映型映画祭の現状の把握を試みた。ただ、野外での映画上映イベントはこれらに限られるわけではなく、今後も増加していくことが予想される。また、本稿は3つの事例の比較検証により、野外上映型映画祭が観客や地域にどのような機能を有しているのかについて考察したが、定量的な検証は行っていない。今後も、できるだけ多くの事例を収集し、野外上映型映画祭にはどのようなマネジメントの展開方向があるのかについての考察を継続していくと同時に、定量的な調査を行っていくことが必要である。

(本研究は JSPS 科研費26380556の助成を受けたものです。)

参考文献

- Bazin, André (1958): *Qu'est-ce que le cinéma?*, Paris: Éditions du Cerf. (小海永二訳 (1967)『映画とは何か1』美術出版社)
- Falassi, Alessandro (eds.) (1987): *Time Out of Time: Essays on the Festival*, Albuquerque, NM, University of New Mexico Press.
- Gore, Chris (2009): *Chris Gore's Ultimate Film Festival Survival Guide, 4th edition: The Essential Companion for Filmmakers and Festival-Gores*, Watson-Guptill.
- Holland, Christopher (2008): *Film Festival Secrets: A Handbook For Independent Filmmakers*, Stomp Tokyo.
- Hong Kong International Film Festival (2003): *Study on the Economic Impact and Tourism Influence of the Hong Kong International Film Festival-Survey on International Experience*.
- Iordanova, Dina and Rogan Rhyne ed. (2009): *"Film Festival Yearbook: The Festival Circuit"*, St Andrews Film Studies.
- Iordanova, Dina and Ruby Cheung ed. (2010): *"Film Festival Yearbook 2: Festival festivals and Imagined"*, St Andrews Film Studies.
- Iordanova, Dina and Ruby Cheung ed. (2011): *"Film Festival Yearbook 3: Film Festivals and East Asia"*, St Andrews Film Studies.
- Iordanova, Dina and Leshu Torchin ed. (2012): *"Film Festival Yearbook 4: Film Festivals and Activism"*, St Andrews Film Studies.
- Iordanova, Dina and Stefanie van de Peer ed. (2014): *"Film Festival Yearbook 6: Film Festivals and the Middle East"*, St Andrews Film Studies.
- Marlow-Mann, Alex eds. (2013): *"Film Festival Yearbook 5: Archival Film Festivals"*, St Andrews Film Studies.
- 赤崎陽子 (2008)「映画祭とは何か—映画祭の歴史と現在」『『映画祭』と『コミュニティシネマ』に関する基礎調査』報告書』コミュニティシネマ支援センター, pp. 54-67.
- 秋吉一郎 (2013a)「2012年度「第5回ひめじ国際短編映画祭」に関する調査」『商大論集』第64巻第3号, 兵庫県立大学, pp. 1-26.
- 秋吉一郎 (2013b)「2012年度「第5回ひめじ国際短編映画祭」の観光消費による経済波及効果の推計」『商大論集』第65巻第1号, 兵庫県立大学, pp. 25-40.
- 石井雅之・ヤマザキムツミ (2013)「ただの原っぱを野外上映会場に変えたやみくもな情熱が、次の世代に受け継がれる」骰子の眼 <http://www.webdice.jp/dice/detail/3938/> (参照日: 2015年9月26日)
- 加藤幹郎 (2006)『映画館と観客の文化史』中央公論

- 新社, p. 149.
- 川村 英 (1995) 『国際映画祭への招待』 丸善
- キム・ドンホ (2011) 『世界のレッドカーペット—「釜山国際映画祭」の父」が見た40の映画祭』 ヨシモトブックス
- 草壁久四郎 (1999) 『世界の映画祭をゆく』 毎日新聞社
- 児玉 徹 (2009) 「日本の映画祭の現状と課題に関する調査報告—東京国際映画祭と湯布院映画祭に係る事例を機軸に据えながら」 『芸術工学研究』 第10巻, pp. 109-130.
- 小松沢陽一 (1995) 『夢人問たちの共和国—東京国際ファンタスティック映画祭10年史』 シネマハウス
- 小松沢陽一 (2008) 『ゆうばり映画祭物語—映画を愛した町, 映画に愛された町』 平凡社
- コミュニティシネマ支援センター (2008) 『「映画祭」と「コミュニティシネマ」に関する基礎調査報告書』 コミュニティシネマ支援センター
- 塩田時敏 (2010) 『世界のファンタスティック映画祭—こんなに楽しく面白い』 近代映画社
- SWASH.JP (2010) 「復活! 星空の映画祭2010」 SWASH.JP <http://swash.jp/event/265/> (参照日: 2015年9月26日)
- 田山力哉 (1988) 『映画祭へのひとり旅』 白水社
- 田山力哉 (1991) 『田山力哉のカンヌ映画祭』 三省堂
- 中川洋吉 (1994) 『カンヌ映画祭』 講談社
- 長野日報 (2014) 「原村・星空の映画祭 来場者1.5倍 最多7958人」 長野日報 <http://www.nagano-np.co.jp/modules/news/article.php?storyid=32145> (参照日: 2015年9月26日)
- 長野日報 (2015) 「原村の「星空の映画祭」7366人を動員」 長野日報 <http://www.nagano-np.co.jp/modules/news/article.php?storyid=34996> (参照日: 2015年9月26日)
- 蓮實重彦 (1993) 『映画巡礼』 マガジンハウス
- 畑中朋子 (2011) 「教育文化支援環境としての映像系フェスティバルについて」 『美術教育学研究』 pp. 271-278, 大学美術教育学会
- 別所哲也 (2009) 『夢をカタチにする仕事力—映画祭で学んだプロジェクトマネジメント』 光文社
- 矢澤利弘 (2011) 「映画祭のマーケティング」 『クリエイティブ産業におけるビジネス研究』 第6号, pp. 3-24, 映画専門大学院大学
- 矢澤利弘 (2012a) 「映画祭における3つのマーケティング—インターナル・マーケティングとインタラクティブ・マーケティングを中心に」 『クリエイティブ産業におけるビジネス研究』 第7号, pp. 3-22, 映画専門大学院大学
- 矢澤利弘 (2012b) 「地域映画祭を事例とした非営利組織の事業測定」 花堂靖仁・高橋治彦編著『近未来の企業経営の諸相—2025年』 pp. 295-309, 中央経済社
- 矢澤利弘 (2013a) 「地域活性化のための映画祭の経営モデル」 『地域活性研究』 Vol. 4, pp. 127-136.
- 矢澤利弘 (2013b) 「イベント創出におけるアントレプレナーシップ—近時の映画祭創設者に対するインタビューから」 『クリエイティブ産業におけるビジネス研究』 第8号, pp. 23-29, 映画専門大学院大学
- 矢澤利弘 (2013c) 「映画祭のインターナル・マーケティング」 『広島経済大学経済研究論集』 第36巻第2号, pp. 1-14.
- 矢澤利弘 (2015) 「短編映画祭における人材育成の現状と課題」 『広島経済大学経済研究論集』 第37巻第4号, pp. 47-60.